

を促し、且その友鍵屋靜齋等が資を借りて、製本全く成しかば、之を京師に獻り、及關東の摺紳、並に有職の人々にまわらせけり。○中略 初脩靜が山陵訪求の爲に京に赴きしどき、彼地に絶て識人なし、當時小澤蘆庵は、古學を好みて萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりとかねて傳へ聞しかば、渠が助を借らばやどて、その京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋て云々とおどなふ程に、小澤が家僕出迎へて、いづこよりと問ふ、いひよるよしもなきまゝに、脩靜まづ佯りて、某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼るゝ者なり、琴を好み候へども、田舎にはよき師なし、主人の翁は琴の妙手にておはするよし、東野の果までかくれなし、是によりおほん弟子にならまく欲して、遙々と來つるにて候といふ、その僕こゝろを得て奥に赴き、云々と告にけん、蘆庵は聲を高くして、あな無益しき問ごとかな、汝出てしか答へよ、主人は久しう客を辭して交を絶たれば、都の中だにも親しう物せるは稀なり、琴は若かりし時搔鳴したりけるを、あちこちの人に知られて、彼に聽せよ、此に教よといはるゝがうるさければ、近ごろ打擢きて薪に代たり、かゝれば所望にしたがふべくもあらず、他に行て求めたまへといふ聲のむし襖一重を隔て定かにぞ聞えける、脩靜は僕が報るに及て、そがしかくといふをしもまたず、更に又推かへして云、翁のおほん答はこゝにもつばらに漏聞たり、某猶一言あり、願は枉て聞たまへ、吾は下野なる儒者なり、云々の志願あれば、屢江戸に遊學しこたみ都に上りしかども、相識れる者絶てなし、翁の古學を好みたまふと、その氣質の俗ならぬは、かねて傳聞ものから、いひよるよしのなきまゝに、琴を學ん爲にとて來つるとはいひし也、こは長者を欺くに似たれども、その虛言は已ことを得ざりし實情より出たれば、許されて對面せられば、肝膽を吐き、志願を告て、翁の資を借らんと欲す、かくても意に稱はずば退けられんこと勿論たるべし、今一たび和殿を勞さん、此由執次たまへといふ、蘆庵もこれを洩聞て、さりとは思ひがけざりき、そは奇しき客人なり、對面せずば悔